

〔視察報告〕

ヨーロッパ博物館視察記 Ⅲ

Survey Reports of the Museums in Europe Ⅲ

間 多 善 行
Yoshiyuki MADA

ジュネーブからローマへ

博物館視察記の主旨からいうと、博物館の見聞だけを書けばいいので、途中の記事は余計なようだが、私の博物館学勉強法によると、最初にも書いたように、この旅行中は『ヨーロッパ』という大博物館の中にいるわけなので、いつでもどこでもとり上げる価値があると思うものはすべて記事にすることになるのをご了承願いたい。

さて、8月4日午後2時5分ジュネーブ空港を離陸した私の乗機は眼下にモン・ブランを眺めながら一路ローマを目指して東南方に飛行している。真夏の午後の日差しを受けて、モン・ブランを中心にした西アルプス一帯が雪と氷に覆われて白皚皚と光り輝いているさまは崇高といおうか、厳粛といおうか、一瞬息も止る程の感激を覚えた。何故こんなに感動を受けるのか考えて見ると、私が前からアルプスに非常に興味を抱いていたからである。その興味の芽は、私が少年の頃ナポレオンのアルプス越えの際、雪崩に遭った瀕死の少年鼓手がなお太鼓をたたいていたという、少年雑誌の記事に始まるらしい。その時の感激は今なお挿絵とともに鮮やかに記憶のスクリーンによみ返ってくる程である。それに、そんなことがなくても、千古の昔から、2億年前の造山運動以来、自然の激しい彫琢を受けてでき上がった姿をまのあたりにすることは感動を覚える筈であるが、人間の関心というものには個人差が激しいもので、私の横に坐っていた同行の友人は一瞥の興味も示さなかった。これから考えて同じ博物館に入っている個人々々の関心は個性によって全く異なるものだと思い知らされた。そんなことを考えているうちにローマ空港が近付いて、着陸の態勢に入るというアナウンスに我に帰って、改めて窓の外を眺めることになった。

窓の外を眺めて、また一つ気が付いたことはアルプス山脈の北側と南側では景観がまるで異なるということだ。北側ではドイツでもフランスでもスイスでも小麦が収穫前で平野は一面黄色に覆われ、それが人家や森と対象をなして色鮮やかなモザイク模様をなしていた。それが南へ来ると小麦畑はすべて収穫されたのかどこにも見えず、

どす黒い大地が露出している。その上不思議なことに木木の緑までくすんで見え、ゲートのいう南国のあかるさなどは少しも感じられない。飛行機から見た限り北が明るくて、南が暗い感じであったが、地上へ降り立つとそれはまた変わってくるがそのことは後に書くときがある。その日はホテルへ着いたのが6時を過ぎていたので、夕食就寝。

翌日はローマ市内観光であるが、これは一日、バスで廻って見て驚いた、ローマは市全体が遺跡の塊りである。現在、人口は400万程だそうであるが、これだけの市で遺跡のどまんなかにある街というのは世界広しといえども他には一ヶ所もなかるう。しかもその歴史がローマ帝国の歴史であり、キリスト教の歴史であり、どちらも世界史の中心をなす超一級品である。文句なしに私はローマ市全体を歴史博物館として扱いたい。

5. 歴史博物館・ローマ

最初に案内されたのがコロッセオである。あのキリスト教徒や奴隷をライオンや野牛と闘わせて楽しんだという円形大劇場である。阿鼻叫喚を思わせるよすがも今はなく、森閑と静まり返った廢墟に夏の日が照り付けているのを見ると私はふと試合のない甲子園球場を憶い出した。アルプスの大景観には身のしまる思いをしたが、人間の造った大構築物には余り感銘を受けなかったのかもしれない。

(2)番目はカタコンベである。お恥かしい話ながら歴史を専攻した私が、ここへ来て実物を見るまでカタコンベというものを聞いたことも見たこともなかった。学会員の皆さんも、ご存じの方は少ないであろう。カタコンベというのは地下に穴を掘って、人間の出入ができるような壕を造り、そこへ墓やちょっとした宗教儀礼ができるようにしたもので、地上は畑になっていて、ちょっと見るとわからないが、処々に入口や明り通りの穴がある程度である。この地下壕はローマ南郊のその一帯に無数にあり、発掘されているのはほんの一部だそうである。その中の一つに入口に家を建て、観光客用に土産物を買ったりする施設を造って、そこ

から穴の一つをガイドが付いて案内してくれる。通路は人一人がやっと通れる位で、それが迷路のように四方に続いている。観光客の通る路は電燈が点いているが、それ以外は点いていないから真暗な枝別れ路が至る処にポッカリと口を明けていて、小さい墓室が次々とあって頭蓋骨が土壇に10個位並んでいる。何ともいえない不気味な穴ぐらである。さすが物に動じない私も、出て来たときは地下の冷気も手伝って顔面蒼白になっていたに違いなく、身体中が暖まってくるのに3,40分かかった。

それでは一体、この地下壕は誰が、何時頃、何のために造ったのかということであるが、それには紀元1・2世紀のローマ帝国のキリスト教迫害の歴史をかいつまんで語らなければならない。

キリスト教は、1世紀半ばには既にローマにも相当信者がいる程になっていた。最初のうちは白眼視はされていたものの左程ひどい仕打ちを受けていたわけではない。迫害が本格的になったのは、あの有名な暴君ネロ(54~68)からである。紀元64年ローマに大火があったとき、誰いうとなく評判のよくないネロの放火説が広がった。これを耳にしたネロは烈火の如く憤り、放火はキリスト教徒だとして、彼等を片っ端から逮捕して十字架につけたり、火あぶりにしたり、獣の皮をかぶせて猛犬にかみ殺させたりした。これがその後もずっと続き、ネロは宮廷の庭園で行ったが、ティトウス帝のときには先程見た円形大劇場が完成(80年)し、以後は民衆の見世物として興行されるという状態が続いた。そのためにキリスト教徒は地下に潜らざるを得ず、カタコンベの構築となったわけである。

(3) アッピア街道

すべての道はローマに通ず、という格言のとおり、ローマは大土木事業を盛んに行った中でも道路の建設は最優先事業とせられていたようである。このカタコンベからローマ城壁南門へ通ずる道は、2,300年前に造られたアッピア街道が今もそのまま保存されている。デコボコの石畳道で、いま見ると粗末なものであるが当時は全天候型の軍用道として立派なものだったのであろう。紀元前312年、第2回サムニウス戦争の最中にアッピア・クラウディウス監察官がローマ市民を指揮して造ったと伝えられている。日本では縄文時代が終って弥生時代が始まろうとしている頃である。

(4) カラカラ大浴場

アッピア街道が城門に入って、1キロばかり行ったところに有名なカラカラ帝(211~217年)の大浴場が

ある。一度に1600人が入れる大浴場を始め、大ホール、図書室、店舗、競技場などを備えた大レジャー施設であった。彼はこれを人民の人気とりに造ったのであるが、その結果は増税や物価高となつてはねかえり、遂には近衛長官マクリヌスの指揮する士官団に暗殺された。

(5) フォロ・ロマーノ

近代都市のど真ん中に忽然と遺跡発掘現場が出現したのがこのフォロ・ロマーノである。現在の路面より4,5m下が当時の地面だったわけで、ベネチア広場からコロッセオへ通ずる大通りに面して現場があるから、観光バスを止めて大通りから、数万㎡はあろうという古代ローマの中心地を展望できるわけである。まさに現地博物館の雄といおうか、これほど雄大な展示物は滅多にあるものではない。しかも、それが古代ローマの公共広場そのものときているから、元老院、シーザーの神殿等の当時の建物の柱や壁跡が半分崩れ落ちたまま残されており、そこへ処々雑草が生えて、夏の日ざしに照らされている様を見て私は芭蕉の「夏草やつわものどもが夢のあと」と同じ感慨に浸ったような気がした。

(6) パンテオン

ギリシャのパルテノンと語呂がよく似ているので間違えられることがあるが、パルテノンの方はアクロポリスの丘の上に建てられた切妻造りのアテナイ神殿で、現在は列柱と正面の桁と合掌の骨組だけ残っているギリシャの象徴のような遺跡であるが、パンテオンの方は、ローマの街並の中に残っているドームを持った円形の建物で、万神殿と称されている。こちらの方は残骸でなく、建物そのままだが残っている。紀元前27年にアグリッパが創建したものである。現在ローマに残っている建物では一番古いものとされている。

以上がローマ市内にある古代ローマの遺跡のうち、主なものの概要であるが、勿論小さいものや中世以後のものは沢山ある。大体ローマ市街は全体にわたって、地下に遺跡・遺物が埋蔵されている可能性があり、市では地下鉄の建設を禁止して、埋蔵文化財の破壊防止に努めているから、将来はもっと沢山の遺跡が発掘されて、嫌でも市全体を博物館にしなければならなくなるであろう。

さて、この仮想「歴史博物館・ローマ」の評点を付けるとしたら、やはり文句なしに星5つである。しかもその中でも最高クラスと考えていいであろう。市内見物はこの位にして、明日は10年来の夢・シスチナ礼拝堂のミケランジェロの壁画にお目に掛ることを楽しみに寝に就

く。

翌8月6日は長年の夢・シスチナ礼拝堂のあるヴァチカンを訪れる。ヴァチカンは人も知るキリスト教の本流・カトリックを統率するローマ教皇の居城である。カトリックの大本山・サン・ピエトロ大聖堂、教皇庁を中心にヴァチカン博物館、シスチナ礼拝堂、大庭園等を合せてヴァチカン市国という独立国家を形成する文字通り文化の大殿堂である。そのうちのシスチナ礼拝堂を含めてヴァチカン博物館を視察することにする。

6. ヴァチカン博物館

入口は古城を思わせる20数メートルはあろうと思われる石壁の中央下部にチョココンとあけられた、裏口のようなところである。遠くから見ると鼠の穴のように見えるが、そばへ寄ると高さ4メートルはあろうという鉄扉のついた大きな門であった。中へ入ると、眼が馴れるまではすり足で歩かなければならない程暗い。電灯などはつけてない。映画で見る中世の古城の中へ入ったような気分である。入口の溜り場からいきなり螺旋階段、ならぬ螺旋状の通路を通して四階まで斜面を昇って行く、ちょうどぶどう酒の栓抜の大きいものと思えばいい。エレベーターや電灯など文明の利器は一切ない。文字どおり中世の世界に入ったわけである。

さて一口にヴァチカン博物館といっても単独の建物ではなく、一つ一つが星4つ、あるいは3つ程度の美術館が7つも8つも集って、一大複合博物館をなしている。ジャンルはそれぞれ異なるが大英博物館やルーブル美術館にも劣らない規模と量を持っている。とりあえずその名前と概略を書き上げると

(1) ピオ・クレメンティノ博物館

ギリシャ古典後期の大理石彫刻をローマ時代に模刻したものが集められていて、いずれも原作は残っていないので、今では貴重なコレクションで、「ラオコーン群像」、「バルベデーレのトルソー」、プラクシテレスの「クニドスのアフロディテ」、「バルベデーレのアポロン」等有名なのが揃っている。

(2) グレゴリアノ・エトルスコ美術館

グレゴリオ16世が集め始めた、エトルリア南部の出土品のコレクションで、代表的なものは1836年にカエレのレゴリニ・ガラッシの墳墓から出土した黄金、銀、ブロンズ、象牙等の精巧な装飾品がある。

(3) エジプト美術館

これもグレゴリオ16世が創設したもので、ラムセス2世の母トウアの巨像、アモン・ラーの坐像、プトレマイオス朝の巨像その他相当数のローマ時代の

模刻を蔵している。

(4) キャラモンティ彫刻館

ピウス7世によって収集されたローマ時代の傑作「プリマ・ポルタのアウグストゥス」、「トラヤヌスの胸像」、「傷つけるアマゾン」、「ナイルの群像」その他ギリシャ彫刻の模作等がある。

(5) 絵画館

絵画だけでも大美術館と言っていいコレクションがあり、11世紀から14世紀にかけてのビザンティン絵画に始まり、ジョットーとその一派、シモーネ・マルティニ、ロレンツォ・モナコ、フラ・アジェリコ等のフィレンツェ派、レオナルド・ダ・ヴィンチとその一派、ベロネーズ、ティチアーノ、カラヴァッジョ等中世期の画家を網羅しており、最後にラファエロのために最大の一室が与えられている。まさに中世から近世にかけての絵画の一大宝庫と言っていいであろう。

以上のような大美術館に相当するものの外に次のような特殊の博物館、図書館がある。

(6) 異教徒考古博物館

(7) キリスト教美術館

(8) ヴァチカン図書館

(9) シスチナ礼拝堂

図書館には現在50万冊を超える写本・印刷本が収蔵されており、15世紀のニコラス5世教皇以来の文書が収蔵されていると伝えられている。伊達政宗が派遣した支倉常長に関する記録も勿論その中にある筈である。これで大体の説明を終ったが、シスチナ礼拝堂だけは項を改めて、もっと詳しく述べるので、全体を概括しておくことにする。

大体、大英博物館とかルーブル美術館等、星5つの超一流博物館は、この時点では私はまだ観ていなかったのであるが、このヴァチカン博物館を観た感じでは、規模や収蔵品の数量等から考えると、このヴァチカンの方が上回るのではないかと思ったが、後に大英、ルーブルを観てから思い合せると確かにそのように思う。ワシントンのスミソニアン・インスティテュートも規模が大きいらしいが、これは収蔵品のジャンルが掛け離れているので比較は難しい。ジャンルの似た部門でこのヴァチカンに匹敵するのは、ソ連のエルミタージュとニューヨークのメトロポリタンの2館くらいではないかと私は思っているが、これはどちらも観ていないので何ともいえない。ヴァチカンはこのくらいにして、さきほどから保留していたシスチナ礼拝堂のことを述べてローマを終るこ

